

シリーズ **今どきの若者事情** その②

前回は、Ehara スタッフのスズキ知恵子さんに高校生について語っていただきました。今回は、日々大学生と関わっている安藤理恵子さんのお話です。

K G K (キリスト者学生会) 総主事

安藤理恵子

入信のきっかけ

私は宮城県出身で、高校生の時に信仰を持ちました。

初めて聖書を読んだのは中学生のときです。きっかけはラジオ放送でした。いくつかの番組を聞きましたが、ルーテルアワーという番組に便りを出したところ、速達で聖書が届きました。キリスト信者の布教の熱意に感動して読み始めましたが、腹が立ってきて10ページくらいでやめました。

その理由は、「キリストが、いばり過ぎじゃないか」と思ったからです。そして、聖書が私を罪人として責めていること、もし一度信じたら「信じるのをやめた」と言うことは許されないと主張していることが分かったからです。

でも高校生の時に、「やはり、神は一人ではないか」と思い、もう一度聖書を読み、信じるつもりで訪ねたのが仙台の保守バプテスト同盟の教会でした。そこで求道し、翌年の7月に洗礼を受けました。

主事になった動機

一浪して大学に入り、卒業と同時にK G K主事に

なり、今年で19年目です。

大学一年のときから、学内のK G Kに関わっていました。大学を越えた全国のK G Kの交わりに関わり始めたのは2年生からです。私はK G Kの学びを通して、聖書の読み方を学び、聖書の本来の意味を追求することが自分を自由を経験しました。そんな中で学生として「主事を助けたい」と思っていました。やがて「みことばに仕えたい」という思いから献身のひとつの道としてK G K主事の道を考えるようになりました。

自分の本当の思いに気付かない

今の学生たちには、ものごとをつきつめて考える機会が少ないようです。クリスチャンホームで育ち、信仰はあるけれど、「なぜ」「何のために」ということについては問われる機会がなく、深く考える必要を感じずに過ごしてきたという学生によく会います。そんな若者が、自分とは別の価値観を持つ人や強い自己主張をする人に会うと、対峙して議論することができません。

K G Kでは1週間の全国リーダー訓練会を毎年開催していますが、昼食後には「静粛時間」という、だれとも話さない、何もしないときを持ちます。普段、音と映像に囲まれて生きている学生たちには、静まる時は新鮮な経験です。日頃いかに静まっていないかということに気付きます。あえて静まる環境に身を置かないと、自分の中の本当の思いや感じていることに気付きにくい時代ですね。

また現代は「自分の気持ち、感情」を何よりも最優先させる傾向があります。その気になってしまっ

たら誰もそれを止められない、と信じています。気持ちに従うのではなく、みことばに従うことを決断するようにならなければなりません。

求道者は減っていない

私の学生時代は、友だちを呼んでこないと集会には集まらない時代でしたが、今の学校はそもそも友だちがでにくい環境になっています。人との関わりが希薄な上に、選択授業が増えて「同じ友だちとずっといっしょ」という状態がなくなり、サークルも下火になり、濃厚な友人関係を持つ機会がありません。ですから今は、ポスターを見てひとりで集会にやってくる人が増えました。

「高校時代からいじめられていたけど、クリスチャンなら優しいだろうと思って来た」とか、「死生観について知りたくて来た」とか、「最近危険なサークルばかりだから、まじめなサークルに入りたくて聖書研究会に来た」という学生もいます。

力強く伝道するクリスチャン学生ではなくても、忠実に聖書を開き、活動を継続していくクリスチャンの周りには、5〜10人の求道者が集まってくることは珍しくありません。「人生」や「死」のようなテーマは重すぎて、友人たちと話そうとすると浮いてしまうけれども、「クリスチャンだったら、真剣な話が出るんじゃないか」と聖書研究会をのぞきに來る人もいます。それだけ学生社会の中で真剣な議論をする空間が少なくなったということでしょう。(以下略)